

咏
草

X
e 2

F
H-4

490.28
王

No. 1372
12 e. 2



346

富士川文庫

水
木



三宅春蘿上

松翁

往々の事より少し不思ひもあまきとおもひ候ふる

柳

角井の井戸の水をかみて御とうすに四十巻の如き

教

えをうながすとせよまばくらわゆる

葉

まちうかられどもうりをせよまばくらわゆる

葉

のまちうかられどもうりをせよまばくらわゆる

タモ

入るのりあくらむ山あくらむ花のタモ



春

音

早春萬年。年のみにせず。歌にて。是も。はの音も。いこむ。と。ゆる。

雅

歌のゆき。音も。ゆゆ。に。是も。つま。と。不。能。能。能。能。能。

夜花

歌のゆき。も。ふ。の。向。く。花。を。歌。さ。く。う。の。夢。を。う。か。

鶯

歌のゆき。も。う。の。う。夜。月。の。あ。り。う。を。う。か。

更

歌のゆき。も。う。の。う。夜。月。の。あ。り。う。を。う。か。

花管

歌のゆき。う。の。う。夜。月。の。あ。り。う。を。う。か。

春駒

ちかくのせの夜の夜はひうらをむねしとせぬ事の約

桜

白骨のよきはあめのうりほのうちのころとのみも

うそのよきとよきとを匂のよきとて東風吹入簾とふとを

すらととれど先にそれ風ぬちあきを花原すりやうす

ときはあくとゆくとゆくとよきとよきとよきとよき

とよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきとよき

菱

楓

月

露

水

空

火

焰

焰

焰

楓

月

露

水

空

火

焰

焰

焰

焰

火

タチヤム一ノ木一木立木ありタカハサギトモアラシタ
タカハサギモアラシタタカハサギモアラシタタカハサギモアラシタ
タカハサギモアラシタタカハサギモアラシタタカハサギモアラシタ

秋
七年とてはあそちのたえぬをみや天の川水
御ひゆうひじまうりぬる夜からを夜するよ
髪衣
負役
行月
葉
愁
情秋
二疊蓬
駒迎

玄外齋　外の月の夜をやさしき月夜

月あは　奔川よりまき枝の桂の月夜
雨月　星の雨の聲よ、一では言ふます

冬

雪詠　あたごをかきかきをひきそとし蓮坂の雪
名脇　残るみゆる月の夜を水をやくも月の夜の月の夜
晚鶴　朝やくさんかきかきの月の夜の月の夜の月の夜
水を　抱すのら水の月の夜の月の夜の月の夜の月の夜
車すを　外りとまく夜をやどりお吉の車うつてゆる人
名脇　歌れよとて之ねり　お吉の車うつてゆる人
冬風　歌ひ歌ひ歌ひの夜をやどりお吉の車うつてゆる人
雪　歌ひ歌ひ歌ひの夜をやどりお吉の車うつてゆる人

考鏡 云々代りやうも序つまうを核を定めれ

又度重い事なるにあらまく不思ひ度の事もあらず
矣、名前は多くもととてりし者すがまことに
終、終一極のうらゆるもとてよしる月よりもよきより

志

志

刻のふじてはかくもん紙のびの道すれど
寄美、刻みをかく時の事、古をかく事もあらず。故
幼、刻るはまくらの意なりかくも書本(のり)をかく
後、改へ、其のれと筆の事す。後の事をかくこと
初逢、刻して書むるかくは筆を経て書むる事す
寄名様、年月よりかくす。筆をかく事を書多きもの
顯、闇にせまくかくしたる後、かくつたむかしの事
顯、闇にせまくかくしたる後、かくつたむかしの事

水の間に 水の間に

アラニヤス
アラニヤス

古の月をかくと白の月をかくと書多き事

おどろき事のよきやうを加減せんとあらう
事等、いはゆる法たのやし拂ひもなほほんとす
事、かこと釈迦のすちまことにあつておもむれ

に仕上もえを折りのまゝを以て人へよこす
例も大半で茶くぼと等のまゝをせらるい
ふてんとあらわれ、がく折りともうとつて物のまゝ
をもじるが、まことに實に折り物の處、活潑
死生の處であるからゆゑども、これより
ぬるる事無し

卷之三

遠林

御多之年、つづく事無し

宵歸人
水なる
桃木とくはの入浴^{まき}よりあく迄もすまうさ昌子、
桃木とくはの入浴^{まき}よりあく迄もすまうさ昌子、

清江集

たまするに極まるものもあつて、やがておぼるは大
抵極めてたくとやうせよまく、さすも次のいわゆる

檢討官

尾

卷之二

監核人

農

卷四

地名

若向玉珂行，一朝失此君。
欲知風氣暖，須待杏花聞。

物名二而
卷之三

帽
牛

かと筆の意のどもどもする考の筋をもつて
詠ふる文をえらひよせの足まれのまゝまゝのうへ
御法すりゆみゆみゆみゆみゆみゆみゆみゆみゆ
世をよんで家を築き
室もあらず身もあらず湯世はとす稻牛

安南孟獲等皆降之

相手の多くは人の形跡よきとやすらぎとまん
されし手のをせぬや奉公の事とくらむとも花の本物も
うらさむやうにうそううそううそううそううそ

老せぬとまへ思ひて居てもうかねを抱ひのまへ

名の後 まことに おもひをことくわらひとめを

うむ

懷四 哀傷 視

後夏夜にしのきやうきうけの様を

寄冬海

感のいのちとひじきのいれをうめよし

懐旧

かねうきえむじゆうのせん

地獄化をゑのくやうりの時名傷

うすき

暮春祝引ひけまほすれちんしこそちとまくの延きも

冬祝

引ひそよすよひづれをせひのむをとこし

春祝

引ひそよすよひづれをせひのむをとこし

秋祝

引ひそよすよひづれをせひのむをとこし

宿題

吉吉のから多幸の枝こしらと皆のまの花くわう

地付海休と秋月

五十四言を浦と主事の風景の秋月の花くわう

寒太郎

つる太刀をすとすとおもひだす

秋月

秋月

